はじめに

古くから、「相手を知り、自分を知れば、敗北することはない」と説かれてきた（「知彼知己者、百戦不殆」『孫子』謀攻篇）。敵となる相手を知ることはさておき、自分を知ることは簡単そうに思われる。しかし、それは平穏無事な毎日を過ごしているからで、いざ我が身に生命の危険が迫ると、だれもが自分でも信じられない思考に陥り行動に出るものだ。これは国家や民族でも同じで、存亡の岐路に立つと浮き足立ったり、羅刹と化して悪逆非道の行ないもあえて辞さない姿に豹変しかねない。

そんな普通ではない状態の自分や相手を知るには、歴史、なかでも戦史に学ばなければならない。日本には幕末の戊辰戦争以来、昭和二十（一九四五）年の敗戦まで格好の教材がそろっている。ところが日本人は、それに学ぼうという姿勢に欠けている。全否定するか、意味もなく礼讃するかの両極端に分かれているように思えてならない。どちらも歴史に学ぶという姿勢ではない。

これまた古くから、「敗者は屈辱に耐えつつ学習する」と語られてきたが、そうではな

い数少ない例外が日本人ではないかとも思う。本来ならば戦争中から、敵である連合軍の戦法・作戦や武器体系を学び、新たな対処法を編みだすことが求められていた。ところがほぼ終戦まで、歩兵学校など陸軍の実施学校では広漠地における対ソ作戦だけで教育が進められ、砲術学校など海軍の術科学校では起こりそうもない艦隊決戦の必勝を追求し続けていた。

どうして日本人は、過去に学ばないかと考えると、毎年前例を踏襲していれば食べていけるという農耕民族の特性からくるのだろう。また、成功体験が大きければ大きいほどその味を忘れられず、同じパターンで仕掛ける傾向がある。その結果、学習していた敵にしてやられて臍(ほぞ)をかむという構図だ。

そしてまた日本人には、目的と手段を混交させがちなところがある。ある目的のために戦うのだが、それがいつしか「戦うために戦う」という意識に陥る。これはぜひとも是正しなければならないこの民族の痼癖(こへき)だが、それを是正する最良の教材は戦史だと考えている。実際、日本が戦った戦争を扱った多くの戦史は、将来の日本に資する示唆に富むものばかりだ。

ただ、戦後世代の人の手によるものだろうが、「組織の自律性、自己変革」といった新

しい概念を切り口とした戦史が目立つようになった。もちろん、それ自体は大きな意味を持つ。しかし、中核となって太平洋戦争を戦った人たちは明治生まれの明治育ちで、「トップ・ダウン」「ボトム・アップ」という言葉すら知らない。やはり彼らが幼いころから慣れ親しんだ『四書五経』や『武経七書』からアプローチしたほうが、当時を支配した思想や心情を理解しやすいだろう。そんな観点でまとめたものがこの拙著となる。

第一章　奇襲を好み、奇襲に弱い体質

完璧な奇襲を達成した真珠湾攻撃

個人の信念が形となった大作戦

太平洋戦争の戦端を開いた真珠湾攻撃は、その構想の壮大さ、大きな戦果などはさることながら、日本軍としては珍しい戦例となった。その特徴は、連合艦隊司令長官の山本五十六大将（新潟、海兵三二期、砲術）自身が着想し、リーダーシップを発揮してプロジェクトを推し進め、成功に導いたということにある。日本軍では床の間の飾り物に徹するのが好ましい将帥像とされるが、彼はそうではない異色の存在だった。だからこそ、戦死した山本への追慕と重なって真珠湾攻撃が長く語り継がれることとなったのだろう。

海軍次官だった山本五十六が連合艦隊司令長官に転出したのは、昭和十四（一九三九）年八月だった。翌十五年三月、連合艦隊飛行作業（演習）が日向灘で行なわれた。陸上攻撃機三六機を主力とする八一機が参加し、第一航空戦隊司令官の小沢治三郎少将（宮崎、海兵三七期、水雷）が機上から指揮するという大掛かりな演習だった。実際に訓練用の魚雷が第一戦隊（戦艦「長門」「陸奥」）に向けて発射された。とくに昼間の雷撃は凄まじい

もので、上空は機影で埋め尽くされ、目標となった戦艦の艦底を次々と魚雷が通過して行く。これを見た者は、「これからは戦艦も浮かんでいられないな」と語り合ったという。

旗艦「長門」の艦橋でこの演習を注視していた山本長官は、だれに言うのでもなく「（この方法で）ハワイの航空攻撃はできないものだろうか」と口にしたとされる。これを耳にした参謀長の福留繁（ふくとめしげる）少将（鳥取、海兵四〇期、航海）は、「航空攻撃をやれるくらいなら、全艦隊がハワイ近海に押しだした全力決戦がいいでしょう」と告げたという（福留繁『史観・真珠湾攻撃』自由アジア社、一九五五年）。ここまでならば、演習を見ての感想に止（とど）まり、真珠湾を航空奇襲して戦端を開くということにはならなかっただろう。

折しも昭和十五（一九四〇）年十一月、イタリア南部のタラント軍港にイタリア海軍の主力、戦艦六隻が入泊していることを偵知した英地中海艦隊は、これに対して夜間航空奇襲を敢行した。空母イラストリアスから発進した攻撃機二一機による雷爆撃によってイタリア戦艦三隻が航行不能となり、地中海の制海権はイギリスのものとなった。戦術的には水深の浅い港湾でも効果的な雷撃が可能だと立証されたことになる。

このタラント航空奇襲の成功が山本長官にどのような影響を与えたかは不明だ。しかし、これに触発されて真珠湾航空奇襲の研究を本格的に始めたと見るのが自然だろう。実際、

昭和十六（一九四一）年一月初頭、山本長官は第一一航空艦隊参謀長の大西瀧治郎少将（兵庫、海兵四〇期、航空）にハワイ航空攻撃の研究を個人的に依頼している。大西は中尉のときに水上機母艦「若宮」に乗り組んだ航空一筋の人で、霞ケ浦航空隊と航空本部で山本に仕えている。それ以来、山本は航空のことならばまず大西に相談するのを常としていた。

連合艦隊司令部での研究は、昭和十四年十月に海軍大学校教官から首席（先任）参謀に転出してきた黒島亀人大佐（広島、海兵四四期、砲術）を主務者として進められた。黒島は先任参謀をもじって「仙人参謀」と呼ばれる奇人で、今で言う「引き籠もり」だった。そんな黒島と、ことのほかギャンブルを好む山本のコンビが生んだのが、非常に投機的な真珠湾攻撃だったと、批判的に語られる場合も多い。

しかし、正統派ではないこの二人にしろ、この開戦劈頭の奇襲によって戦争の帰趨そのものが決まるとは考えていなかったはずだ。この奇襲の効果が物理的にも、心理的にも薄れないうちにマレー、スマトラ、ジャワなどの南方資源地帯を占領し、石油などの資源を内地に還送して戦力化し、戦争目的である「自存自衛」の態勢を確立する。本当の勝負はそれからだと認識していたはずだ。事実、昭和十六年五月に一応の成案を得た連合艦隊戦

策（作戦計画）は、次のような常識的な線に収まっていたとされる。

一、好機を狙い、空母機動部隊が挺進（ていしん）、航空奇襲を敢行
二、南洋群島に展開する基地航空兵力による決戦
三、邀撃（ようげき）決戦海面は、マーシャル群島北方海域
四、前線航空戦の推移と島嶼（とうしょ）航空基地の攻防戦をめぐって艦隊決戦が生起しうるものとし、全般作戦を案画

昭和十六年八月中旬、連合艦隊と第一航空艦隊の参謀は軍令部を訪れ、真珠湾奇襲をもって対米英蘭戦の戦端を開く案を提起した。このとき、軍令部は初めて航空奇襲計画があることを知ったというから、連合艦隊がフライングぎみに計画を進めていたことがうかがえる。続いて九月中旬、毎年恒例の軍令部総長が統裁する作戦図演（図上演習）が終了してから、連合艦隊側の要望で軍令部第一部（作戦）の主要幕僚との協議が行なわれた。主なテーマはハワイ空襲についてであった。

このころは、軍令部の空気は真珠湾航空奇襲に否定的だった。その理由だが、ただでさ

え不足している航空戦力をハワイと南方に二分することの問題だった。台湾からマニラへ、ベトナムからシンガポールへの爆撃にはそれぞれ戦闘機の掩護が必要であり、航続距離からこの方面にも有力な空母機動部隊の投入が必要と見られていた。また、空母機動部隊を東や西に動かせば、機密保持がむずかしくなることも大きな懸念材料だった。

ハワイ空襲の技術的な可能性を研究した大西瀧治郎と、実施部隊の第一航空艦隊参謀長だった草鹿龍之介少将（石川、海兵四一期、砲術）は、二人そろって山本長官を訪ね、「成否は五分五分ですから、止めたほうが賢明でしょう」と具申した。さらには、軍令部総長の永野修身大将（高知、海兵二八期、砲術）までが、「投機的できわどい作戦」と難色を示していたという。こうまで反対されると、普通の人ならば諦めて自説を引っ込めるところだが、山本長官は違った。

日本人によく見られる思潮だが、強い反対に遭うと論理や理屈の「理」ではなく、人情や情念の「情」に訴えることがある。それでも相手に受け入れてもらえないと、信念、信仰といった「信」を持ちだし、どこか神懸かってくる。さまざまに反対された山本長官は、ハワイ空襲で残る問題は「天佑神助」（天や神のたすけと加護）だけだとした。もし、この作戦が不成功に終わったならば、それは我に天佑神助がなかったことを意味するから、

よろしく全作戦を取り止めるべきだと山本は論じ続けた。さらには、この計画が認可されなければ連合艦隊司令長官を辞任するという、ある種の恫喝までした。

本来ならば大元帥たる天皇を統帥面で輔翼（ほよく）する軍令部総長の永野修身が、投機的な作戦で戦端を開くことは日本の国家戦略にそぐわないと判断すれば、真珠湾奇襲作戦は中止となる。その後始末は山本長官の更迭など人事措置で収まる。ところが昭和十六年十月十九日、永野総長は、「山本にそれほどの自信があるのならば、やらせようではないか」との人情論に陥り、軍令部総長という重職の存在意義を忘れて認可した。